

ふくろう新聞

＜発行＞ ホーム郷会
 特別養護老人ホーム
 淡路支部委員
 洲本市中川原町
 中川原28番地1
 TEL: 0799-25-8550
 FAX: 0799-25-8551
 ホームページ
<http://www.normanet.ne.jp/~hyoufun/>

今年はいくろうの郷も5周年の節目を迎え、記念事業として取り組んだ5周年記念式典、第6回ふくろうふれ愛まつり、5周年記念誌の発行等たくさんの方のご協力のお陰で成功に終えることができました。来年は龍年。先日来日されたブータン国王は「龍はみんなの心の中におり、『経験』を食べて成長し、強くなる」といつていました。ふくろうの郷も5周年事業の「経験」を経てさらに成長したいものです。

中川原ふれあいセンターの取組み事例を報告

第15回全国聴覚言語障害者福祉研究交流集会

11月19・20日京都で開催された集会に参加しました。聴覚障害者を支援する施設・関係者がそれぞれの取り組み事例などを報告・議論する集会で、全国から500人以上が参加しました。

私もふくろうの郷で取り組んでいる中川原高齢者・障がい者地域ふれあいセンター構想を通して「地域とともに」という法人理念をどのように目指しているのかを全国の仲間に伝えたい、との思いで参加しました。

中川原中学校閉校がなぜふくろうの郷に結び付いたのか、「ふれあいセンター構想とは」「おたがいさま中川原とは」を中心にレポート報告しました。皆さん真剣に聞いてくれ「地域とのつながりを作っていくこと」の大切さがわかった。参考に

したい「ふくろうが行っていることは先駆的なこと。これが全国に広がるように頑張つてほしい」などありがたい声をいただきました。

全国の仲間からの声を励みに今後もふれあいセンター実現に向け様々な活動をしていきます。(準備室：濱田)

ぽかぽか温泉ツアー

11月25日「おたがいさま中川原試行事業」を実施しました。第2回目となる今回の参加者は5名でした。前回参加者の要望を取り入れ食事付き。ゆーゆーファイブで一番風呂を楽しんだ後、ふくろうの郷へ。ふくろう調理職員が真心を込めて作った料理、お品書きに皆さんに非常に喜んでいただきました。「おいしい」「もうおなか一



▲揚げたての天ぷらも振る舞いました

杯」とどんどん出てくる食事を楽しまれた後、「次はいつ行くの？」との声。今回参加された方の中にはリハビリを休んで参加された方もおり、「次もリハビリ休んで参加するわ」と嬉しい言葉が。昼食も寒い時期だしみんなで鍋をつつこう、となりました。今後試行事業を企画していきますので、ご興味のある方はぜひともご連絡ください。

ひとりぼっちの人をなくそう

～年末のお礼にかえて～

施設長 大矢 暹
 「ひとりぼっちのろうあ者をなくそう」というのは、兵庫のろうあ者の合言葉で、その合言葉の交わり合いが、幾重にも波紋を広げ、響き合い、「淡路ふくろうの郷」を生み出し、ふくろうの郷の理念「一人ひとりを大切に、共に生きる」の理念ともなりました。

聞こえない・話せないという機能障害だけが、一人ぼっちに追いやるものではありません。ろう高齢者は家族を持つこと、つくることが抑圧され、相対的に配偶者・子どもがいまぜん。戦中は「戦力ありえないもの」と烙印を押され、国家総動員のもとで劣悪な条件で働かされ、それ以外の者は、在宅放棄、精神病院、施設に隔離されました。それは平成の今も引きずっています。障害者自立支援法がそうです。社会サービスを「受益」と

して1割負担を課し、やむなく在宅化、ひとりぼっちに追いやる事例が相次ぎました。一人ぼっちを決定づけたのはそうした政策、人々の中の未熟な障害者観や自己責任論です。

こうした歴史の上に生まれただふくろうの郷だから、地域に目を向け、地域の「一人ぼっちをなくそう」という流れに動くのは自然な方向です。

地元の連合町内会や民生児童委員、立命館大学の石倉先生、学生さんたちの意見や知恵の出し合い、力添えで具体化されてきたのが、「なんでも相談室」「おたがいさま中川原」「ふれあい広場桜ヶ丘」など、来年春から旧中川原中学校の校舎で展開される新しい地域共同化の事業です。

あわせて、この仕組みを兵庫の聴覚障害者の暮らしの場にも広げようと、その拠点・地域聴覚障害者センターの構築が進められています。記念誌・ふくろうの郷物語も教材にして「暮らしを語る会」を開いていきます。

2012年も、みなさまと手を携え、歩みを更に前に。変わらぬご指導ご支援をお願いします。

障がい者就労支援と共に働いてみて

第14回ふくろう学習会

11月5日に行われた学習会では障がい者の就労支援に貢献されている柿原鶏卵販売専務取締役、柿原孝司様に、障がい者と共に働くために何が大切かなど、困難を乗り越えた経験に基づいて話していただきました。従業員の方からも頑張っていた様子に誇らしげにお話していただきました。



▲ 講演のあと、参加者を交え、パネルディスカッション

参加された皆様からの感想を一部掲載させていただきます。

「人と人との縁でお互いに学んで成長できることをあらためて感じました。時間に追われる時代ですが何事にも待つことの大切さ、待つことで良い関係づくりができることを考えて行きたいと思いました」

「障害を特別視することなく、本人の希望、意志を受け止め、実行されている柿原さん。仲間意識を打ち出し仕事に対する姿勢など、私たちが学ぶ事が多いです」

「オーナーの熱意がヒシヒシと伝わるとても良い講演でした。自信と誇りを自分の仕事に持って取り組まれてきた様子が良い伝わってきました。人は環境によって成長できること、改めて学ぶことができました。」



12月1日

おのころ屋開店

このたび、県の空き店舗活用助成を受け、洲本市内塩屋筋商店街でおのころの家の出張所として、菓子工房「おのころ屋」が開店しました。現在、聴覚障害者2名、職員2名で手作りのマドレーヌやクッキーなどを販売しています。来年春からはパンの販売や店内での喫茶も計画しています。のんびりとおしゃべりも楽しむことができます。「体にやさしい」をキャッチフレーズに頑張りますので、みなさん是非ご来店ください。



▲ オープンした店の前で

お気軽にお立ち寄り下さい

【星・海ユニット】

11月24日今回は姫路セントラルパークへ入居者16名職員11名総勢27名でいきました。寒かったです、車内から動物を見学することができたので、皆さん喜ばれていました。動物が目の前にはいるので、『お〜』『近い近い』と興味深く見ていました。

普段は写真を撮るのも嫌がる方が、隣に座っている方に、『見て見て!』と声を掛けて、一緒に楽しめていました。外出レクを通じて、交流を持てた事が良かったです。(生活援助：山西)

ユニットでお出かけ

【山ユニット】
11月1日に、入所者、職員合わせて10名でカプチーノに行ってきました。

わらび餅セットや、ソフトクリーム等を食べながら、昔話に花が咲き、職員共々笑顔の花が咲きました。帰りには、海沿いをドライブし、楽しいひと時を過ごすことが出来ました。

(生活援助：谷口)



密林の王者虎もお出迎え



▲ 秋空の下、たくさんの動物を見てきました。



▲ 店内にて ショート利用者

命の尊厳 人間としての幸せを今こそ

21世紀・老人福祉の向上をめざす施設連絡会

職員研究交流集會に参加して

11月12・13日、山形県で開催された集會に参加しました。

仙台空港に着いた時、東日本大震災で家族も家も全て失った人たちの気持ちを思うと本当にいたたまれない気持ちになり、今普通に生きていること、そして何の不便もなく暮らしていることがどれだけ幸せなことか改めて感じました。

初日は「命の尊厳—平穩死とは何か」というテーマの講演が一番心を打たれました。先生のお話の中に「看取りは入所した時から始まっている。どう支えてきたか、どう看てきたか、が大切である。『死期が来た』と、どうして分かるのか...。死期は自然に任せるものであり、私達が決めるものではない。」というお話が印象に残りました。

また、「胃ろう」については、老衰の果ての胃ろうは、国民の80%が「望まない」と考えているようですが、現実には胃ろうを造設しており、人は「自然死」を知らないから...というこ

とを知り、驚きました。医療により1日でも長く生かし続けてもらうのか、自然に寿命を全うするか、どちらがいいかという問題ではなく、いずれは誰にもやってくる「死」に対して、自分自身や家族がどうするかを考えるための話を聴くことができました。

2日目の分科会では、「認知症の方のケア」に参加しました。



全体会議の様子

他施設の職員や講演して下さった先生から沢山の元気や勇氣、これから仕事をしていく中でのヒントをいただけました。そして発表者の様々な思い、入居者に対する愛情や想いが伝わってきました。みなさん真剣に意見発表や意見交換をし、あつという間に時間が過ぎました。

今回、分科会でレポート発表でき、ふくろうの郷の取り組みやみ私たちの気持ちがみなさんに伝わり嬉しかったです。相手と同じ目線で相手の気持ちに寄り添う。そして共感し、敬意を表すことの大切さを学ぶことができました。

「21世紀・老人福祉の向上をめざす施設連絡会」(略称21・老福連)

高齢者福祉現場での豊かな援助実践と公的福祉制度の確立に向けて交流と協力、協同の取り組みを広げるために、2002年6月に発足。毎年、「職員研究交流集會」を開催しています。

50年ぶりの帰郷〜勝楽佐代子さんの思い〜



▲ご親族のお墓参りにも行くことができました

11月8日に勝楽佐代子さんの故郷、舞鶴へ帰郷してきました。7月にご主人の故郷に帰られてから、自分も帰りたい！と絵を描いて下さり、その絵を元に舞鶴の聴言センターにもご協力頂き、生家を探し当てることができました。

50年ぶりの帰省だったようですが、生家は変わっておらず、井戸や倉を懐かしそうに眺められ、ご主人にも当時の暮らしぶりを説明されておられました。お墓参りではお母さんや妹さんが亡くなったことも知らなかった。来れて良かったと言っ

センターでは若かりし頃一緒に手話を学んだ仲間たちと再会。最初は互いに知らないと言っていました。いつしよにアルバムをめくっていくうちに記憶が蘇り、涙を流して抱きあつておられました。

全く手がかりが無く、家族も生存されていないだったので、帰郷を実現することができ、喜んでいただけました。
(生活援助：小林)



▲舞鶴の聴言センターで昔の仲間と交流

続・地域を語る

第36回 お正月と三番叟

三番叟にかかると縁起伝承については別として、昔から三番叟は厳格な一つの儀式で、祝福するための神への奉仕で静かな演技である。

舞台では、三番叟、翁、千歳がならぶ、地謡に小鼓、太鼓を鳴らし、笛を吹いて四人がかりで拍子をとる。三味線は使わない。

三番叟を演じるのは人形芝居の本番に先立つてに限らず、正月の祝いの門付をはじめ祭つてある神々の前でやったり、農村では、農耕の苗代、地祭り、池の改修工事の竣工式などで演じられる。

中でも門付について述べると、元旦から回る人や、二日からの人もあったが、いづれも正月松の内(20日ま

で)に回っていた。昔は、ずいぶん遠方まで行ったが、三番叟を持って回るのに縄張りをはつきりしていた。勝手に定まった場所以外に簡単に行けないことになつていたが誰でもはいり放題の自由地区という場所もあった。

門付については、人形使い(色の黒い翁、色の白い翁)二人と鼓と笛、鈴で拍子を取る三人一組が普通のものであった。農家の各家々の座敷へ上つて神棚の前で、天下泰平、五穀豊穰、家内安全を祈願して舞っていた。 ※当中川原では昭和30年後半までの正月、紋付羽織姿の三人一組の三番叟回しと、荷足の姿が伝承されていたが人形座元の衰退によって見られなくなり、今はただ、正月の風物誌として伝えられている。(次号で三番叟の地謡を紹介予定)

新見貫次著「淡路人形芝居」より抄出

地域交流会会長

北岡 肇



白と黒の翁面(写真上)

「淡路人形浄瑠璃資料館20年のあゆみ」より



左から三番叟と翁と千歳の人形浄瑠璃

ふくろう喫茶とカクテルバーのお知らせ

バー開催日時: 12月22日(木)
13:30~16:30

カクテル各種1杯 ¥300

◆ ふくろう喫茶&バーでふくろうの郷の
入所者さんと一緒に、楽しい時間を過ごしませんか。

喫茶開催日時: 12月18日(日)
13:30~15:00

コーヒー・紅茶・ココア・
カルピスなど1杯 ¥200より



しめ縄作り、餅つきのお知らせ

日時: 12月26日(月) 13:30~16:30
場所: 淡路ふくろうの郷

今年も、地域のご協力で
入居者と地域の方が一緒になつてしめ縄作りや餅つきをします。



みなさまのご参加をお待ちしております

何が足りないか

何が必要か

石川県聴覚障害者センター
施設長 北野 雅子

入所しているろう高齢者の人生を丸ごと受け入れ、これまでの到着点と課題をまとめた記念誌の中で、ろう夫婦が、検査と偽つて断種手術をさせられた体験や、人権を威圧されてきた多くのろう者の過去を入所者自らが赤裸々に語り、「変えられる過去があるならそれを変え、今日と明日をつくってゆくために活かしたい」としているところに感動しました。

孤独死する高齢ろう者や、阪神淡路大震災をきっかけに老人ホーム建設など新しい資源つくり頑張った事例も。盲ろう者や高齢ろう者の支援のあり方など、石川には何が足りないか、何が必要か、新しい資源を生み出すための参考になります。

淡路ふくろうの郷 開所5周年記念誌

頒価 2,000円

ホームページで感想文掲載中!
「淡路ふくろうの郷」等で検索して下さいね。